

第85回

特別支援教育実践研究センターセミナー報告

日 時 平成25年11月17日(日) 午前10時～12時
 講 師 西館有沙先生（富山大学人間発達科学部准教授）
 演 題 事例にみる障害理解教育の実践と研究上の課題

1 障害理解とは

障害理解とは、障害のある人に関わるすべての事象を内容としている人権思想、特にノーマライゼーションの思想を基軸に据えた考え方であり、障害に関する科学的認識の集大成である。これは、障害者が求める理解と必ずしも一致しない。すなわち、障害者の求めのすべてに応じることが障害理解ではない。障害理解は、私たちの人格や優しさを図るリトマス試験紙でもない。他者の多様性を受け止め、障害者がどこで援助を必要とするかを知り、その状況では手伝おうとする態度をもち、その場で適切に行動でき、さまざまな状態の人と対等に付き合えるひとの育成が、障害理解の目指すところなのである。したがって、たとえば必要のないところまで援助しようとすることは、障害理解がある状態とは言えない。

授業で障害理解を扱う場合は、対象となる子どもの発達段階に対応した内容と方法を取ることが重要である（図1、図2）。その段階に応じて気づくこと、知ること、考えることを通して障害理解を進めていく。障害者への共感（心で感じること＝情緒的理解）は、障害理解を進める上で不可欠なものである。ただし、障害のない人たちは障害者に共感する過程で、障害による影響を過大視し、大変な苦勞をしていると想像するために、「障害者はかわいそう」という思いを強くもつことがある。このことをふまえ、障害やそれによる影響を正しくとらえられるように、必要な情報を併せて伝えていく必要がある。

2 障害理解を促す授業実践

学校において障害理解教育を実施する際に留意すべき点は、①学習者の障害理解の発達段階に合わせた教育を行う、②学習者の偏見や誤解を解く、③学習者の認識を歪める内容及び方法をとらないことの3点である。また、教育者が偏見や誤解が生じる要因（知識が不足していること、知識がない状態で障害者

と直接接すること、マスコミなどによる情報の強調化、大人の不適切な対応など）を知っておく必要がある。

ここで、「目が見えないと何もできない」「目が見えない人は私たちにない特別な能力をもっている」などの誤解を受けやすい視覚障害について、子どもたちの理解を促すことをねらった授業を紹介したい。小学3年生を対象とし、「目が見えなくてもできることはたくさんある」ことを実感してもらうため、硬貨やシャンプー・リンスの容器の識別体験、目隠しをしての靴履き実験等を行った。目隠しをしての歩行体験は、子どもたちに恐怖や不安感を強く与えて終わってしまう可能性があったため、本実践では座ったまま目隠しをして物を触る体験を行った。授業前は靴を履くという単純な動作でさえも、視覚障害者一人ではできないと考える子どもが多かったが、授業後には76%の子どもが「視覚障害者一人で行える」と考えるようになった。他の動作（着替えや食事、外歩き、入浴など）についても同様の変化が認められた。

3 障害理解教育における課題

現在の障害理解教育の問題点として、①障害者の苦勞、苦悩の協調、②頑張っている障害者の協調、③安易なシミュレーション体験の実施、④「思いやり」の気持ちの育成の偏重、⑤障害者に無計画に講話を依頼、⑥点字・手話・車いす・盲導犬の協調、⑦「障害者をかわいそう」と思っているといけないと教え込む教育、⑧障害者も健常者も「みんな同じである」と教える教育、⑨「障害は個性である」と伝える教育、などが挙げられる。

たとえば①②では、「障害者は一生懸命、健気に、苦勞しながら頑張っている存在である」といったステレオタイプな見方を子どもに植え付けてしまう危険性がある。③は、「怖い」「不便だった」等と感じるだけで終わってしまう活動を指す。適切な体験では、「体験知」を材料に考える活動が含まれ、それをいかに態度形成につなげ、実施的行動に結び付けていくかが検討されている。

これからの障害理解教育は、総合的な学習の時間に限らず、様々な時間を活用して教育に継続性をもたせ、子どもの発達段階に配慮して、系統的な教育を行うことが望まれる。また、教育のねらいを具体的に定め、それが達成されたかの評価を行い、教育効果を検証することも必要不可欠である。

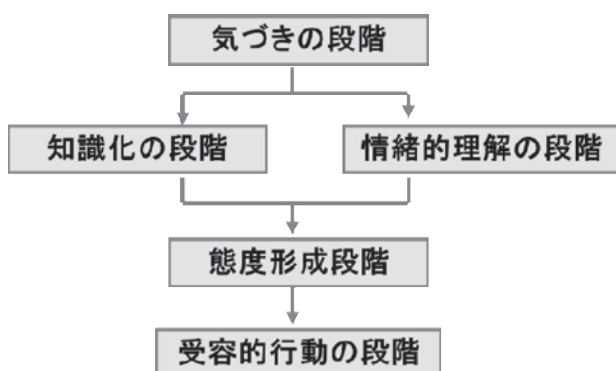


図1 障害理解の発達段階

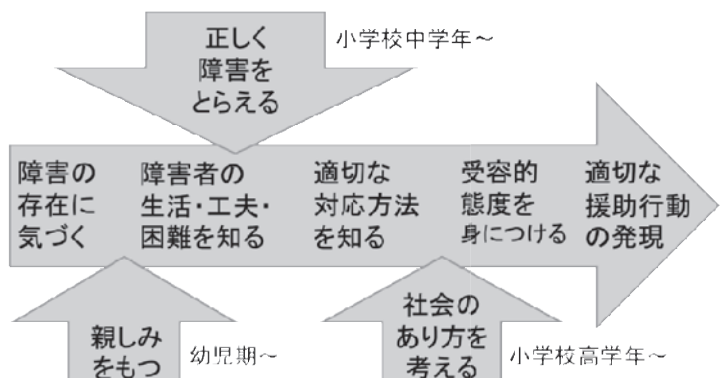


図2 発達段階に応じた学習内容